

令和2年度 校内研修計画

大藤小学校

1 学校課題

大藤地区は、甲州市塩山地区の東部に位置し、古くから、桃、すもも、ぶどう等の果樹栽培がさかんな緑豊かな地域である。地域の方々や保護者は、学校教育に協力的で、児童は総合的な学習をはじめとする様々な教科のなかで、安心して地域に出て学習している。また、読み聞かせやふれあい集会等で、地域の方が定期的に学校に来て、児童とふれ合う活動もある。

全校児童数は35名で、年々減少している。昨年度に引き続き今年度も3、4学年と5、6学年が複式学級となり、複式解消支援教員を配置していただいて国語・算数等の教科は単級にて指導している。

学年の人数が少ないので、休み時間などは異学年で一緒に遊び、上の学年の児童が下の児童のサポートをしており、全校児童の仲が良い。その反面、競争心に欠け、場に応じた対応ができないことが課題としてあげられる。授業の中では、発言はできるものの、教師対児童に留まってしまい、友達の意見に対して自分の考えを述べる等、子ども同士の横のつながりが弱い。また、固定化された人間関係から言葉を介さなくても互いがわかり合ってしまうという面もある。言葉を介して上手に自分を表現できる力の向上やコミュニケーション能力の育成を目指すとともに、自ら考え、判断し、行動する児童を育てていきたい。

2 研究主題

「主体的に表現する児童の育成」
～小集団における対話的な学びをつくる授業の工夫～

3 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

少子高齢化、情報化、グローバル化、人工知能の発達などの社会的変化は加速度を増し、将来を予測することが困難な時代になっている。子どもたちは、このような変化の激しい時代だからこそ、これからの社会を生き抜くための資質・能力を求められている。そのため、知識の質や量の改善とともに、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりが重視されている。さらに、社会の変化に目を向けて、教育が普遍的に目指す根幹を維持しつつ、社会の変化を受け止めていく「社会に開かれた教育課程」の編成が必要となってくる。新学習指導要領では、「育成すべき資質・能力」として、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力 人間性等」の三つに整理し、その実現のためには、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」が必要とされている。3つの学びは、それぞれが分けられるものではなく、他の2つの学びにもつながっている。そこで、今年度は、「対話的な学び」に着目し、研究を進め、また、本校の特色でもある小集団における対話的な学びを充実させることで主体的に表現する児童の育成を目指したい。

(2) 昨年度の研究から

本校の校内研究は、「主体的に表現する児童の育成」という研究主題を掲げて3年目になる。昨年度は、「主体的・対話的で深い学び」を視点とした授業の工夫ということで、峡東教育事務所の中村英彦指導主事を招き学習会を実施した。主体的・対話的で深い学びの実現に向けて授業の中での様々な工夫を指導として、課題提示、発問等授業手法を示唆いただいた。これらの学習を通し、本校の特性である少人数を生かすとともに、児童一人一人を大切にしたい一人一実の践授業がなされた。その成果として、授業の中で、発問の工夫等意識することができた。また、小集団作りや、授業改善へとつなげることができた。課題としては、本校の特色である少人数を生かした授業を実現していく中で授業の手法や迫り方をもう少し追求しさらに焦点化し研究を進めていくことが必要であるとあげられた。また、昨年度の研究を受けて、さらに一人一人の個性を認め、生き生きと活動する児童の育成を目指し、少人数を生かした児童全員が主役になる「主体的な学び」を追究していく。

4 研究の具体的内容と方法

- (1) **授業づくり** . . . 学力の実態把握と少人数や集団における効果的な学習方法と授業実践。
 - ・NRT検査、全国学力・学習状況調査を分析して、学習面の成果を把握し、課題を明確にして今後の授業改善に生かす。
 - ・各種調査で明らかになった児童の課題を改善するための効果的な学習方法の実践をする。
 - ・指導主事を招聘しての授業研究の実践と一人一実践の取組。(11月までに。年間研究計画に入れ)
 - ・講師を招聘しての研修。「小集団における対話的な学びをつくる授業の工夫」についての学習。
 - ・少人数や小集団、個を生かした「対話的な学び」の実現のための授業実践と検証。(コミュニケーション、ICTの活用も含む)
 - ・甲州市 Teacher's Note の活用。
 - ・学力プロジェクトの3つの部会の取り組みの実践と活用。
 - ・めあてと目的を明確にした一人一実践。
 - ・授業におけるICT(iPad, edutab, TV会議システム等)の効果的な活用。
- (2) **学級集団づくり** . . . 児童の実態把握と集団づくり。
 - ・hyper-QUを生かした児童理解と集団づくり。PDCAサイクルを活用。
 - ・K13法を用いたhyper-QUの結果分析とアタックシートを活用した集団づくりを行う。児童一人一人を丁寧に見とり、個を大切にする。
 - ・アタックシートの対応策には、学年全体だけでなく、要支援群に属する児童や、プロットの位置が教師の見とりと違う児童を中心に置いた策も考える。

- ・全体でK13法を使って分析・考察を行う。
- (3) 学びを促す環境づくり・・・学校生活の基盤づくり。
- ・「大藤スタンダード」「家庭教育実践事例集」「家庭教育 子育てQ&A」「家庭学習の手引き」を活用した家庭学習の効果的な実践の取組。
- ・5つの合言葉の具体的な場面での取組を実践。学年に応じた「大藤スタンダード」の徹底。
 - 〈わくわく〉・・・勉強のスタートは、驚きや疑問、楽しく学ぶ。
 - 〈のびのび〉・・・何事も夢中である。徹底してする。
 - 〈なかよし〉・・・いじめや仲間外れを生まない集団でいよう。
 - 〈にこにこ〉・・・あいさつ、返事をしっかりする。
 - 〈いきいき〉・・・自ら考えて行動する。自分で決めて、自分で守る。
- ・「ふじっこノート」の年間を通しての実施をする。
- ・家庭学習スタンバイの時間を帰りの会の前にとる。
- ・家庭学習と授業を有機的に結びつけ、知識探求や学習の復習をする。
- ・ノートが終わったら、校長先生にも見てもらう。校長室前に積んでいく。
- ・ふじっこノートをコピーして、1年教室の廊下に学年ごと掲示する。(各学年2枚)
- ※担任が掲示する。学びをうながす点から、良いところやポイント等を入れる。
- ・毎週水曜日の朝学習は、1年廊下の算数プリントを、金曜日は漢字プリント行う。個々の能力に応じて、目標を設定し、計算の基礎・基本の力を付け、計画的に学習を進める自主性を養う。
- ・「大藤スタンダード」に基づき、生活面や学習規律の統一を行う。

5 年間研究計画

回数	研究テーマ	教科・領域	担当	学年	授業時期	TC要請
1	4 / 3 昨年度の状況について		相澤	全		
2	4 / 8 本年度の方向性について		相澤	全		
3	4 / 1 5 研究内容・方法、年間計画等について	授業改善 学級集団づくり	相澤	全		
4	4 / 2 2 校内研究の確認	授業改善 学級集団づくり	相澤	全		
5	5 / 1 1 「小集団において対話的な学びを作る授業の工夫」についての学習会	学級集団づくり	相澤	全		○
6	5 / 2 7 昨年度のQU分析とアタックシートの活用からの成果と課題と今後の取り組み(1, 2年)	学級集団づくり	相澤 各学年	全		
7	6 / 3 昨年度のQU分析とアタックシートの活用からの成果と課題と今後の取り組み(3・4年, 5・6年)	授業改善	相澤 各学年	全		
8	7 / 1 4 『いじめ問題の現状とこれから』について学習会	学級集団づくり	教頭	全		
9	8 / 1 7 教育課程研修還流報告	授業改善	各担当	全		
10	9 / 9 「小集団においての対話的な学びをつくる授業の工夫」における実践等の共有化	授業改善	相澤 各学年	全		
11	9 / 2 3 学年の課題解決のための学習計画づくり(一校一実践シートより)	授業改善	担任	個		
12	9 / 3 0 学年の課題解決報告会	授業改善	担任	全		
13	10 / 7 第2学年授業案検討	授業改善	2年	全		
14	10 / 2 1 第2学年授業案検討	授業改善	2年	全		
15	11 / 1 1 第2学年研究授業	授業改善	2年	全		○
16	11 / 1 8 K13法によるhyper-QUの分析(1, 2学年)	学級集団づくり	相澤 各学年	全		
17	11 / 2 5 K13法によるhyper-QUの分析(3・4年, 5・6年)	学級集団づくり	相澤 各学年	全		
18	12 / 2 研究紀要作成について 研究の成果と課題について(提案)		相澤	全		
19	1 / 2 7 研究の成果と課題について		相澤	全		
20	2 / 1 7 研究紀要作成		相澤	全		
21	2 / 2 4 研究紀要製本		相澤	全		
22	3 / 9 来年度の方向性について		相澤	全		